

連載
第80回

福聚山史

文池浦泰憲

江戸の下層民(2)

●非人小屋の仕組み

前回述べたように、常圓寺境内に建てられていた「非人小屋」に住むのは「抱非人」と呼ばれた人たちであった。彼らは小屋単位で日常生活を送り、小屋が立地する町や寺院の用役も担っていた。

江戸時代の非人小屋の数は、時代によつて変動があるが、寛政十二年（一八〇〇）には江戸全体で七百三十四軒あったという。これらは、浅草・品川・深川・代々木の四人の「非人頭」によつて管轄され（これに木下川^{きげがわ}を入れて五分割される場合もあった）、それぞれ三百六十八軒、二百三十六軒、七十三軒、五十軒あったという。ちなみに常圓寺の小屋は、おそらく四谷以西を管轄する代々木非人頭の下にあったと思われる。

さらにそれぞれの小屋には「小屋頭」という管理者がいた。小屋頭には、地域の管轄主である非人頭が幕府から命じられた溜（重病人の収容施設）の管理や、牢屋人足や刑場での諸役、また堀川の清掃役などが割り振られていたが、その現場での仕事を小屋で生活する抱非人たちが担ったものと思われる。

●非人の組織

先の四人の非人頭は、それぞれ浅草非人頭善七、品川非人頭松右衛門、深川非人頭善三郎、代々木非人頭久兵衛といった。彼らは世襲制で、その下にいる小屋頭も世襲であった。そしてこうした組織の一番上に「弾左衛門」という頭領がいた。弾左衛門には、幕府から江戸のみならず、他地域の被差別民の統轄をする権限を与えられ、また触頭と称して全国の穢多非人に号令を下す権限も与えられていたという。その弾左衛門の報告によると、寛政三年（二七九）には、浅草非人頭の配下五百五十一人、品川非人頭の配下百六十人、深川非人頭の配下四十六人、代々木非人頭の配下二十五人がいた。『享保世話』という書物に「代々木久兵衛手下、板橋浄蓮寺地内五兵衛小屋、がんち三介」と非人の名が記されるが、これは「代々木非人頭久兵衛の配下、板橋浄蓮寺地内の小屋頭五兵衛の抱える非人、がんち三介」との意であり、弾左衛門を頂点に、（非人頭—小屋頭—抱非人）という縦の所属系統があったことを表している。

●非人の生業

嘉永七年（一八五四）に、品川非人頭松右衛門が記した史料によると、非人の仕事（生業）には、①不

浄物のとりかたづけ②土さらい③行き倒れ変死人のかたづけ④古雪駄直し⑤古本・紙くず拾い⑥浄瑠璃語り、物まね、袖乞い⑦各役所からの御用に対する人足、などがあつた。

あまり担い手のない町々の清掃や雑事、先に触れた役所の御用などにも従事していたことがわかるが、⑥のようないわゆる大道芸にも関わっていたことが注目される。明和年間頃に「物まね」で人気を博した松川鶴市という芸人は非人であつたという。

●「物貰い」

非人はこうした様々な業務により日々の糧を得ていたようであるが、彼らにとつて主たる収入源は「物貰い」であつたと考えられる。さまざまな意見の相違もあるが、江戸の町で「物貰い」といえば非人とほぼ同じ意味を指していたともいわれている。

幕府は何度も禁令を出し、非人が「強いて物を貰い受けようとする行為」に対しては、「悪ねだり」として戒めた。けれども非人の貰い自体については咎めるものではない、とわざわざ断っていた。



『江戸職人歌合「物貰いする親子」』（『国立公文書館デジタルコレクション』より転載）

また、非人小屋には「勧進場」という小屋ごとに物貰いができるテリトリが決まっていたが、その勧進場内で仏事や祝儀があつたときには、そこを預かつている小屋頭が代表して町方から米銭を受け取り、毎月の三日や五節句などに表店から一定額を受け取ることもあつたという。このことから、物貰いは非人の生業であり、権利とすらみられるような社会観念があつたといえるのではないだろうか。

●非人小屋に入ること

非人頭はそれぞれの配下の抱非人に「非人提札」という鑑札を発行した。この提札の中央には大きく、車善七配下には「車」、松右衛門は「松」、善三郎は「善」、代々木村久兵衛は「久」と焼き印が押されていたという。そしてこの提札を持つ者たちから、雪駄直しや物まねなどの稼業や、物貰いで得た稼ぎを上納金として納めさせる一方で、小屋頭は、先に述べたような町方から「物貰い」した米銭を配下の抱非人に分配したという。

江戸時代を通じて、町へ流入する困窮者の扱いは大きな社会問題であつた。当時の史料によると、町々で行き場を失った彼らはたびたび「非人頭へ渡」されたという。このように「抱非人」とされた人たちには、行き倒れや病人や罪人、勘当された家を追い出された者もいたというが、こうした人々が配属される非人小屋は、いわば生活の基盤のない社会的弱者の受け皿とも考えられるのである。